

# モヨロ貝塚出土の銛頭

高橋 健

## 1 はじめに

北海道網走市モヨロ貝塚はオホーツク文化を代表する遺跡の一つである（図1）。東京大学文学部列品室には、1948年にモヨロ貝塚調査団によって行われたモヨロ貝塚10号竪穴の発掘調査の出土資料が所蔵されている。この調査の報告は、『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下巻（駒井編 1964）に別篇として収録されているが（駒井・佐藤 1964, 以下旧報告とする），全ての資料が提示されたわけではなかった。本稿ではこのうち骨角製銛頭について再報告を行い，その内容を検討したい。

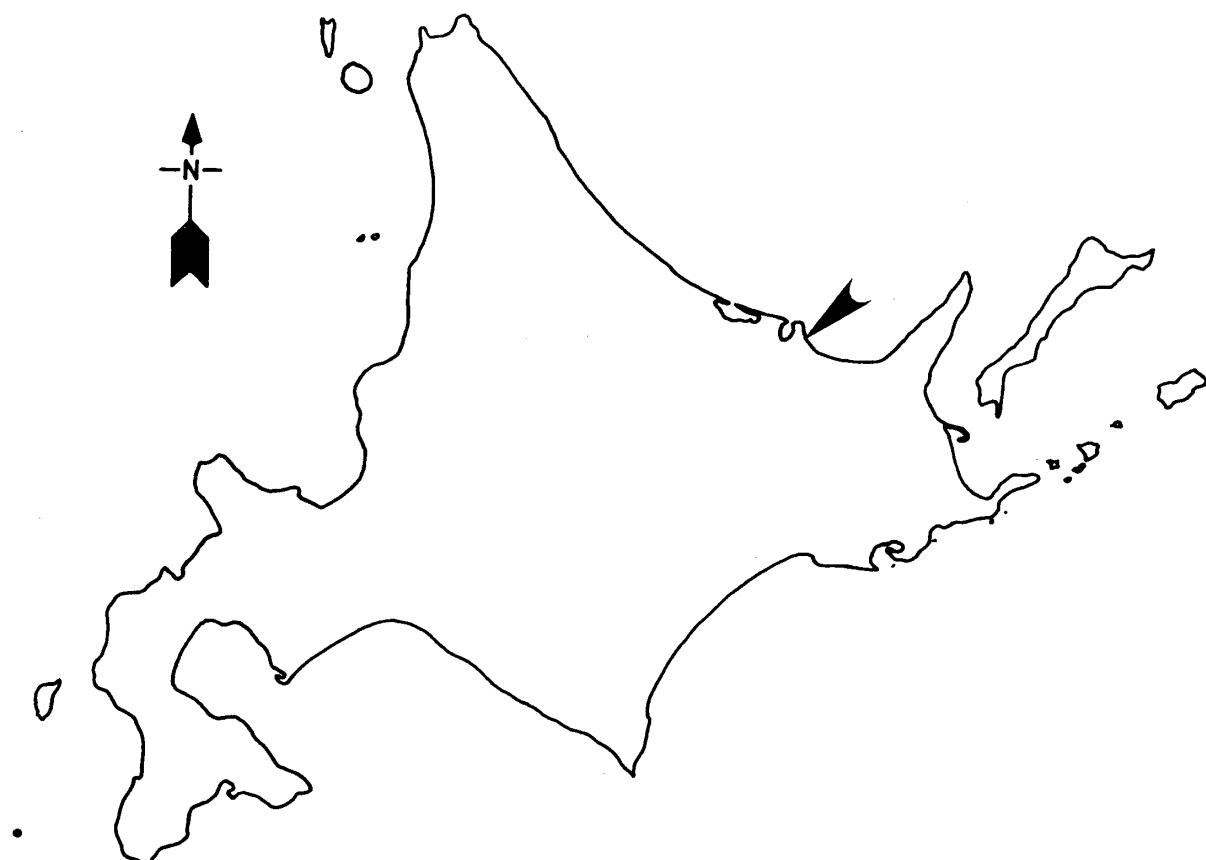


図1 モヨロ貝塚の位置

## 2 東京大学文学部列品室所蔵の銛頭

### 2-1 資料について

10号竪穴からは125点の骨角器が出土したとされており、器種別に各層の出土点数が示されている（旧報告：第2表）。このうち床面出土の33点を含めて43点の写真が掲載されている（同前：PL.80）。資料の一部については『考古図編』に写真が掲載されており（東京大学文学部 1964：図版11），佐藤によっても一部の銛頭の実測図が紹介されている（佐藤 1954）。また一部については東京大学総合研究博物館において行われた『北の異界－古代オホーツクと氷民文化』展の際に展示され、図録に写真が掲載された（西秋・宇田川編 2002）。資料の多くには列品室の収蔵番号が与えられ、遺物カードに記載されている。

現在これらの資料は列品室のケース及び天箱に収納されている。ただし主として未成品や原材からなる未報告資料があるため、資料の総数は約200点であり、かつて報告されたものよりも多い。本稿ではこのうち銛頭とその未成品、計23点の再報告を行う。今回報告する資料の一覧は表1に記載した。本稿で報告するにあたって新たに番号を与えたが、過去の報告との対応関係は表1に示されている。未報告資料5点が含まれていることに加え、器種分類の基準がやや異なること<sup>1)</sup>、接合した資料が存在することから、旧報告とは点数が若干異なっている。

資料の多くにはシールによる注記がされており、鉛筆等によって直接注記されているものもある。表1に注記の記載内容を表示した。これらの注記は基本的に発掘区ないし出土位置と層位を表していると考えられる。しかし旧報告には発掘区や出土位置については記述がないため、詳細は明らかではない。また層位は、10号住居址床面、下層住居址、貝層、貝層上、表土、不明に分けられている<sup>2)</sup>。今回の報告でも旧報告に従い、床面、貝層、貝層上、表土に分けた。以上のように、個々の注記の内容については現状では不明な部分が多いため、今回は表1に注記の内容を示すに留めておく。

### 2-2 分類

オホーツク文化の銛頭全体を対象とした分類としては、前田（1974）による回転式銛頭のA群～E群の分類がよく知られている。筆者は、銛頭の用語および分類について、以前に縄繩文時代の銛頭を扱った際に詳しく論じた（高橋 2001a）。そこでは、① 銛頭の分類において、柄への装着方法と抵抗機能の2つの基準を区別するべきであること、② 抵抗機能の分類基準を明確にする必要があること、の二点を指摘した。そしてオホーツク文化の銛頭についても、この立場によって前田分類を再構成した図を示した（高橋 2002：図2）。一方、前田は最近「回転式」と「カエリ式」に加えて「複合式」を設定し、また回転式のA～E群に加えてF群を新たに設定し直すという新しい分類案を発表している（前田 2002）。複合式の設定は前述した筆者の②の意見に応えたものだと考えられるが、新F群の設定と共に検討を要する問題である。しかしこれらのタイプはいずれも出

表1 モヨロ貝塚10号竪穴出土鉗頭属性表

No.	図	分類	旧分類	注記	層位	状態	素材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	登録	佐藤論文	考古図編	旧報告	図録	備考
1	図2-1	雌形 I 類	迴転鉗頭1	AC3	表土	完形	海獸骨	58	11	7	2.6	480					
2	図2-2	雌形 I 類	迴転鉗頭1	AB3	表土	上半・尾部欠	鹿角	33	15	9	2.5	480	図版13-4				
3	図2-3	雌形 II 類	迴転鉗頭1	AC灰下	表土	頭部一部欠	鹿角	97	16	9	6.9	480	図版13-3	PL80-39			
4	図2-4	雌形 IV 類	別種の迴転鉗頭	AC1	表土	尾部一部欠	鹿角	59	18	9	3.9	470	図版24-1	PL80-42	写真27		
5	図2-5	雌形 III 類	迴転鉗頭2	AB3	表土	尾部欠	海獸肋骨	39	6	14	1.9	480	図版14-4	PL80-40			
6	図3-1	雌形 I 類	迴転鉗頭1	住貝上	貝層上	頭部欠	海獸骨	71	7	3	1.6	481					
7	図3-2	雌形 I 類	迴転鉗頭1	住貝層上	貝層上	頭部・下半欠	海獸骨	56	15	7	4.3	481					
8	図3-3	雌形 I 類	迴転鉗頭1	貝層中	貝層	完形	海獸四肢骨	92	14	10	8.4	470	図版9-1	図版11-2			
9	図3-4	雌形 I 類	迴転鉗頭1	なし	貝層	完形	鹿角	49	11	6	2.8	478	図版9-2				
10	図3-5	雌形 I 類	迴転鉗頭1	貝層中	貝層	完形	鹿角	51	10	7	2.6	478					
11	図3-6	雌形 I 類	迴転鉗頭1	AC外具中	貝層	下半欠	海獸骨	103	14	9	9.3	478					
12	図3-7	雌形 I 類	迴転鉗頭1	貝層中	貝層	頭部欠	海獸骨	64	11	5	2.9	478					
13	図4-1	雄形	有鉤鉗頭	BB下	床面	頭部一部欠	鹿角	80	9	6	2.4	479		図版11-3	PL80-13	写真28	
14	図4-2	雌形 I 類	檜	AB西壁	床面	下半欠	海獸骨	101	27	7	13.1	479		図版11-4	PL80-12		
15	図4-3	雌形 I 類	迴転鉗頭1	ADF	床面	右下半欠	海獸四肢骨	89	14	11	8.0	479	図版9-3	PL80-15			
16	図4-4	雌形 I 類	迴転鉗頭1	ABF	床面	尾部欠	海獸骨	104	15	6	8.5	479		PL80-14			
17	図4-5	雌形 I 類	迴転鉗頭1	ABF	床面	尾部欠	海獸骨	78	11	13	6.0	479		PL80-16			
18	図4-6	雌形 I 類	迴転鉗頭1	ACF	床面	下半欠	鹿角	38	12	5	1.8	479		PL80-17			
19	図5-1	未成品		住貝中	貝層		海獸骨	91	19	8	10.9						
20	図5-2	未成品		貝	貝層		海獸骨	123	11	6	6.4						
21	図5-3	未成品		住貝中	貝層		海獸骨	138	16	8	14.2						
22	図5-4	未成品		住貝中	貝層		海獸肋骨	141	14	10	17.7						
23	図5-5	未成品		住貝中	貝層		海獸肋骨	123	14	5	7.7						

「登録」は列品室遺物カードの収蔵番号、「佐藤論文」は佐藤「我が国に於ける回転式鉗頭について」(1954), 「考古図編」は東京大学文学部「考古図編」20 (1964), 「旧報告」は駒井・佐藤「オホーツク遺物の特色」(1964), 「図録」は西秋・宇田川編「北の異界—古代オホーツクと氷民文化」(2002)における図版番号をそれぞれ表す。

## 高 橋 健

土例がサハリンにほぼ限られていることもあり、本稿ではこの問題については詳しく触れない。

上でも述べたように、鉈頭の分類基準には、柄への装着方法に基づくものと抵抗機能に基づくものとがある。しかし本稿で扱う資料に関しては、二つの基準による分類結果がある程度ストレートに対応するため、柄への装着方法に基づく分類基準によって記述する。本稿で用いる分類は以下の通りである。



雌形鉈頭は基部に柄を挿入するための構造をもち、雄形鉈頭はそのような構造をもたない。雌形鉈頭をさらにⅠ～Ⅳ類に細分する。Ⅰ類は開窓式で、索溝が柄を結縛する機能を兼ねている、つまり繫留機能と固定機能とを兼ねているタイプである。これを兼用式と呼んでおく<sup>3)</sup>。前田分類ではA群にあたる。これに対してⅡ類はⅠ類と同様におおむね柳葉形の開窓式鉈頭であるが、索孔と柄結縛溝を有し、繫留機能と固定機能とが分離しているタイプである。これを分離式と呼んでおく。前田B群にあたる。Ⅲ類は閉窓式の鉈頭である。オホーツク文化の閉窓式鉈頭には、抵抗面の幅が狭いタイプ（前田C群）と広いタイプ（前田D群）とがあるが、列品室所蔵資料に含まれているのは前者だけである。Ⅳ類はⅡ類と同じく開窓式で固定機能と繫留機能が分離しているタイプであるが、器体の形態が異なっており、おおむね円錐形である。F群（前田1974）<sup>4)</sup>、Type F（大塚1976）、タイプF（宇田川1980）などとされているもので、アイヌ文化期の鉈頭である。

### 2-3 資料の紹介

#### 2-3-1 表土出土の鉈頭

表土からは5点の鉈頭が出土した（図2、図版1・2・4）。雌形Ⅱ類～Ⅳ類はこの層からのみ1点ずつ出土している。

No. 1は完形のⅠ類鉈頭である（図2-1）。No. 2はやはりⅠ類鉈頭の尾部破片で、黒く焼けている（図2-2）。上半を欠いているためⅡ類鉈頭であった可能性も否定できない。尾部は中央から右側にかけて欠損しているが、左下に切り込みがみられ右側にも切り込みの上端が残されている。尾部両側に浅い切り込みを入れていたものであろう。索溝の下縁には幅1mmの突帯を巡らせてその上にごく細く浅い線を刻み、また左側縁に並行して細い隆起線を作っている。索溝の縁を突帯状に作る点は、擦文文化の鉈頭によくみられる特徴である（前田1997）。しかし擦文文化の鉈頭の尾部は、三距に作る場合も切り込みが均等な鋸歯状であり、本資料のように側縁を細く斜めに切り

モヨロ貝塚出土の鉛頭

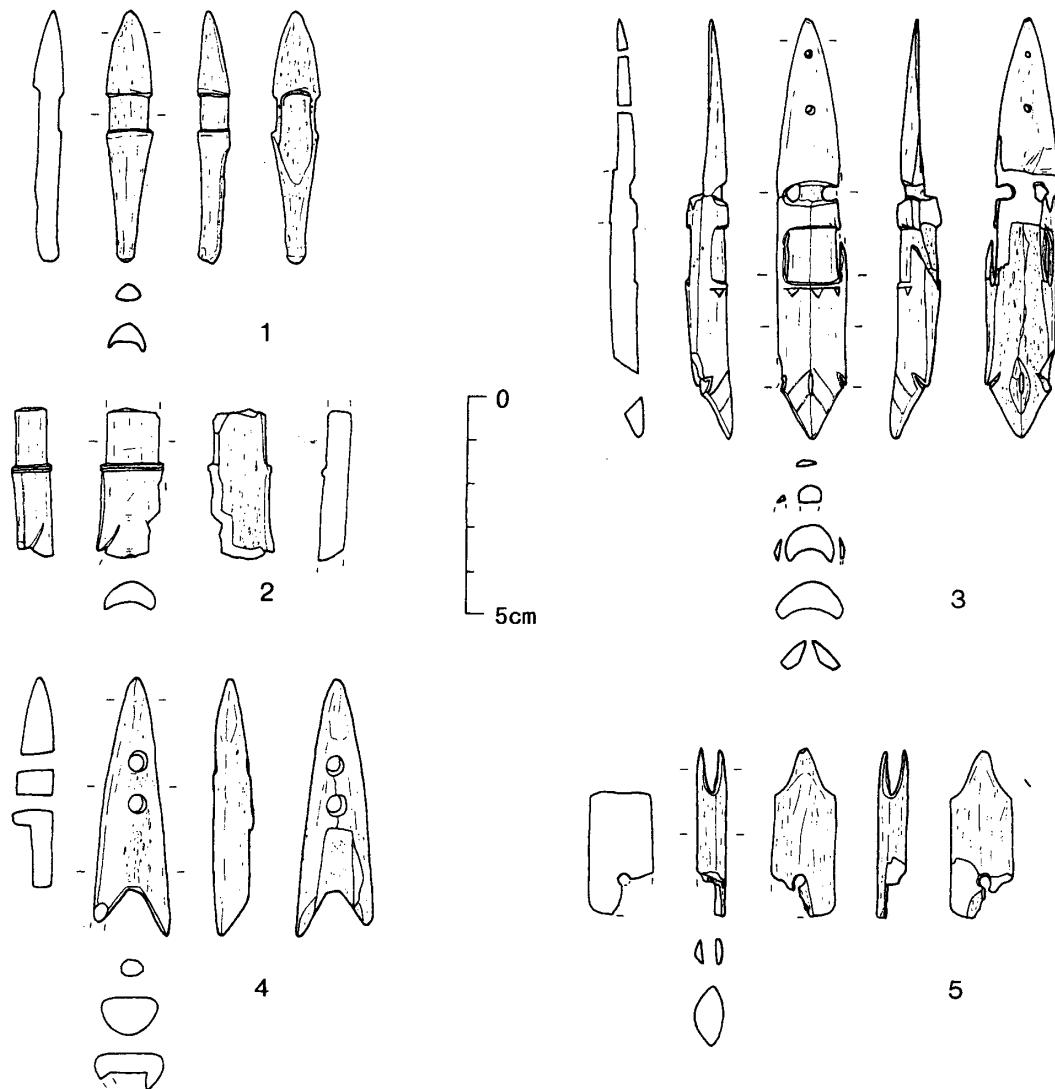


図2 10号竪穴表土出土の鉛頭

込む例は知られていない。したがって本資料はオホーツク文化の所産と考えていいだろう。

No. 3はⅡ類鉛頭であり、腹面側の頭部から柄溝先端部を欠くが、ほぼ本来の長さを残している。索孔部で折れており、旧報告では別々に報告されていたが、接合することが判明した(図2-3)。径1.5mmの目釘孔が2箇所あり、金属製の鏃を装着したものだろう。索孔は径3mmで横に並び、背面側の溝でつながっている。左側は背腹からの穿孔がずれて不整な形になっている。もっとも特徴的なのは柄結縛溝の構造であり、右側は一部破損しているが、両側に長さ11~12mm、幅1mmのスリットを作っている。溝の両脇に細長く橋を残したような構造である。尾部は全体としてはV字形に尖るが、左右の角に切り込みを入れて浅い三距をしている。中央に縦5mm、幅1mmのレンズ形の孔が腹面側から開けられている。また尾部に細く浅い刻線による文様が施されている。索溝直下に直線とV字形三つの組み合わせが、尾部中央の孔の上下端から両側縁に向かって斜線

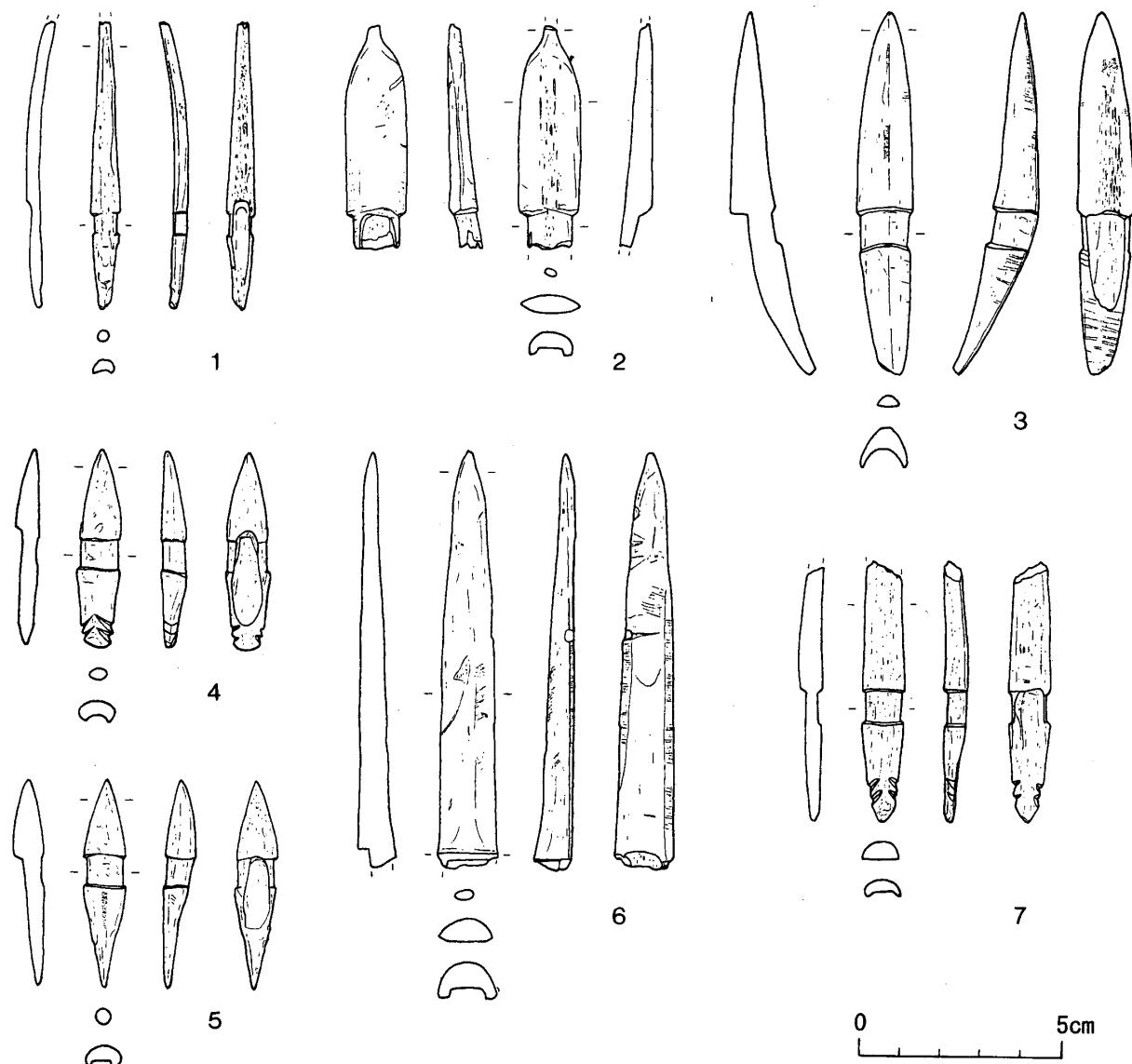


図3 10号竪穴貝層上・貝層出土の鉛頭

が、それぞれ刻まれており、またV字形の刻線で左右の切り込みを縁取っている。

No. 4はIV類鉛頭で、アイヌ文化期に属するものとしていいだろう（図2-4）。径4 mmの索孔が縦に並び、柄結縛溝はみられない。左距先端と窓の左側壁が破損しているが、側壁はほぼまっすぐ立ち上がっていたものであろう。このタイプの鉛頭においては穿孔によって柄溝を形作る技法が用いられる場合があるが（高橋 2001b），この資料についてはそのような痕跡はみられない。

No. 5はⅢ類鉛頭で、このタイプの鉛頭としては小形である（図2-5）。尾部を欠損しているが柄槽と導索溝を一部残している。断面形は左右非対称なレンズ形で、背腹縁ははっきりとした稜になっている。芯の部分にレンズ形の海綿質が残存しており、海獣肋骨製であることが分かる（図版4参照）。

### モヨロ貝塚出土の銛頭

#### 2-3-2 貝層上出土の銛頭

貝層上からは2点のI類銛頭が出土した(図3-1・2, 図版1・2)。

No.6は非常に細長く華奢な作りである(図3-1)。索溝は両側から抉りを入れただけであり柄溝も浅いが、いずれもしっかりと作られていて未成品ではない。尾部先端を削ってやや薄くしている。No.7は器体の断面が扁平な橢円形になり、頭部はなだらかな丸みをもつ肩を作つて細くなっている(図3-2)。先端を欠くが針状に尖るものであろう。このような先端部の類例は栄浦第二遺跡出土資料(右代1992:第3図-7)などにみられる。また背面側に海綿質が位置しているのも製作技法上の特徴といえよう。

#### 2-3-3 貝層出土の銛頭

貝層からは5点のI類銛頭が出土し、うち3点は完形品である(図3-3~7, 図版1・2)。

No.8の尾部は切り出し状で、側面と腹面がわずかに波打っているが、これは製作時の切断の痕跡であろう(図3-3)。厚みがあり堅牢な作りの資料である。頭部に擦痕がみられる。No.9は尾部の両側に2箇所ずつ刻みを入れている(図3-4)。尾部先端は薄くなる。No.10は鋭く尖った尾部をもち、尾部に一部擦痕が残る(図3-5)。No.9とNo.10はともに柄溝の形状が先端に向かつてやや細くなるV形である点で共通する。No.9の柄溝先端の位置が索溝上縁よりも上に位置していることも含め、やや特徴的な柄溝の形状であるといえよう。No.11はI類銛頭の上半部の破片であり、残存部の下端に索溝と柄溝の上端がみられる(図3-6)。残存長だけで10cm以上あるため、本来はかなり大形の資料であったのだろう。表面に一部擦痕が残る。No.12は頭部を欠く資料で、尾部の両側に2箇所ずつ刻みを入れている(図3-7)。

#### 2-3-4 床面出土の銛頭

床面からは6点の銛頭が出土した(図4, 図版3)。雄形銛頭1点以外は、全てI類銛頭である。

No.13は頭部刃溝の片側が破損している以外ほぼ完形の雄形・鉤引式の資料である(図4-1)。細身で華奢な作りで、逆鉤は両側につくが非対称である。基部は四角柱状で柄に装着するための加工は特にみられない。索孔は径3mmである。No.14は旧報告では槍と分類されていたが<sup>5)</sup>、大形で頭部に逆鉤をもつI類銛頭の頭部破片であろう(図4-2)。腹面側の海綿質部分が破損しているが、下端右側に索溝上端の痕跡をわずかに残す。No.15はやはり頭部に逆鉤をもつI類銛頭であるが、逆鉤は深い。尾部右側面にはV字形の刻線文様が刻まれている(図4-3)。深く鋭い刻線を何度も刻み直しており、No.3にみられる刻線とは違いをみせている。No.16~No.18はいずれも尾部か下半を欠くI群だが、断面形において違いをみせている(図4-4~6)。おおまかにはNo.16とNo.18が扁平であるのに対して、No.17は厚みがある。またNo.16とNo.18についても、前者は腹面が平らな半截レンズ形、後者は不整なレンズ形という違いがある。またNo.17は先端部の断面形が扁平ではなく円形になる。

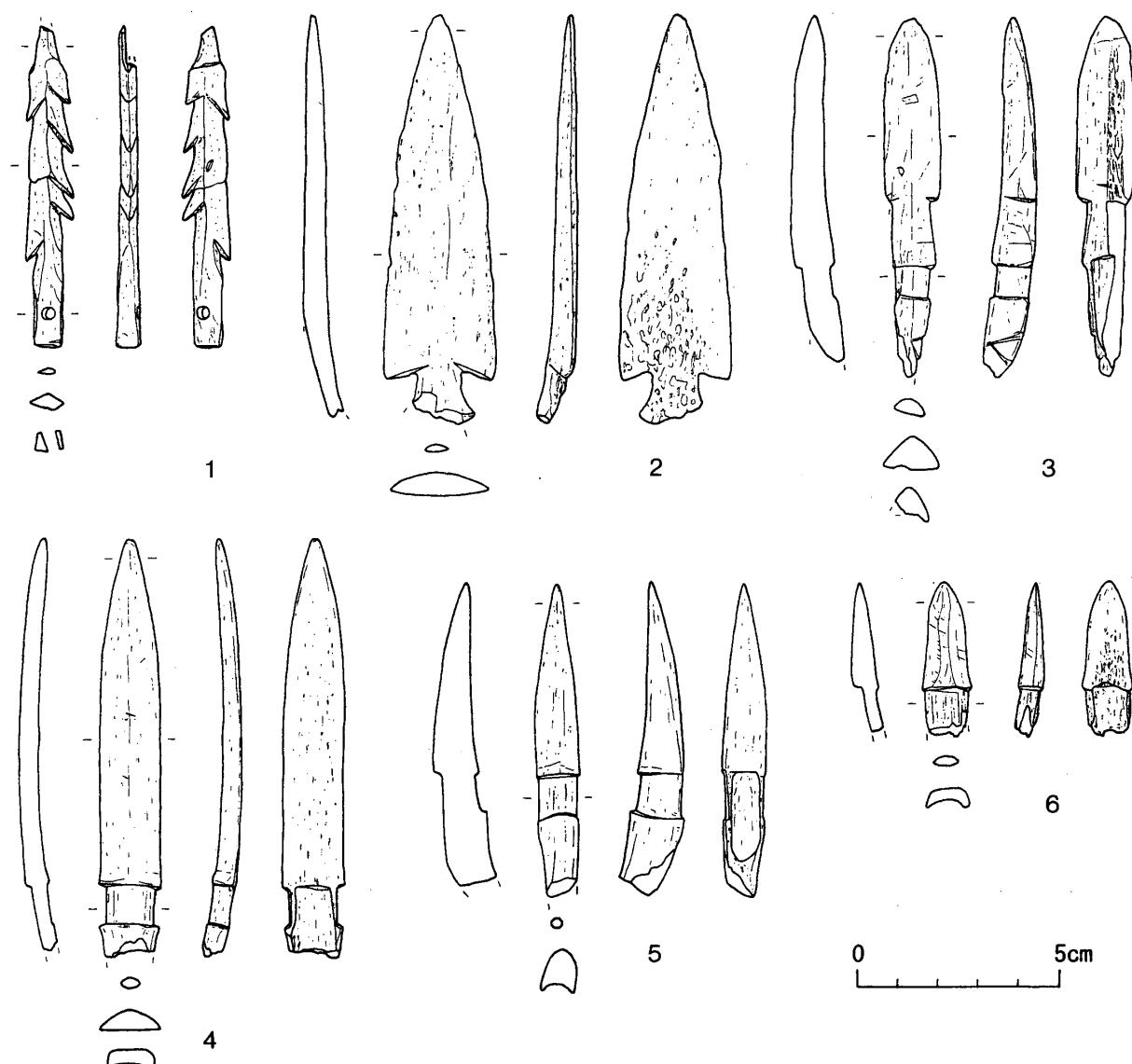


図4 10号堅穴床面出土の鉈頭

## 2-3-5 鉈頭未成品

加工痕のある骨角片がかなりの量出土しているが、そのほとんどは未報告であった。これらの原材・未成品のうち、鉈頭の未成品の可能性がある資料を図5に示した。全て貝層出土で海獣骨製である。

No.19は長方形の原材の尾部をV字形に切断し、両側から加工を加えている（図5-1）。索溝と尾部を作る途中の段階であろうか。No. 2・3にみられるように両側に切り込みを入れるのかもしれないが、同形態の尾部をもつ資料に比べるとやや厚みが足りないようにも思われる。他4点はやや反りのある原材を用いている。No.20は幅が狭い柳葉形で、No. 6のような細身の鉈頭を作るものであろうか（図5-2）。No.21は背面側に原材の海綿質が位置する例である（図5-3）。今回報告した資料の中では、No. 7が同様に背面側に海綿質がみられる完成品である。No.22は海獣

モヨロ貝塚出土の鉈頭

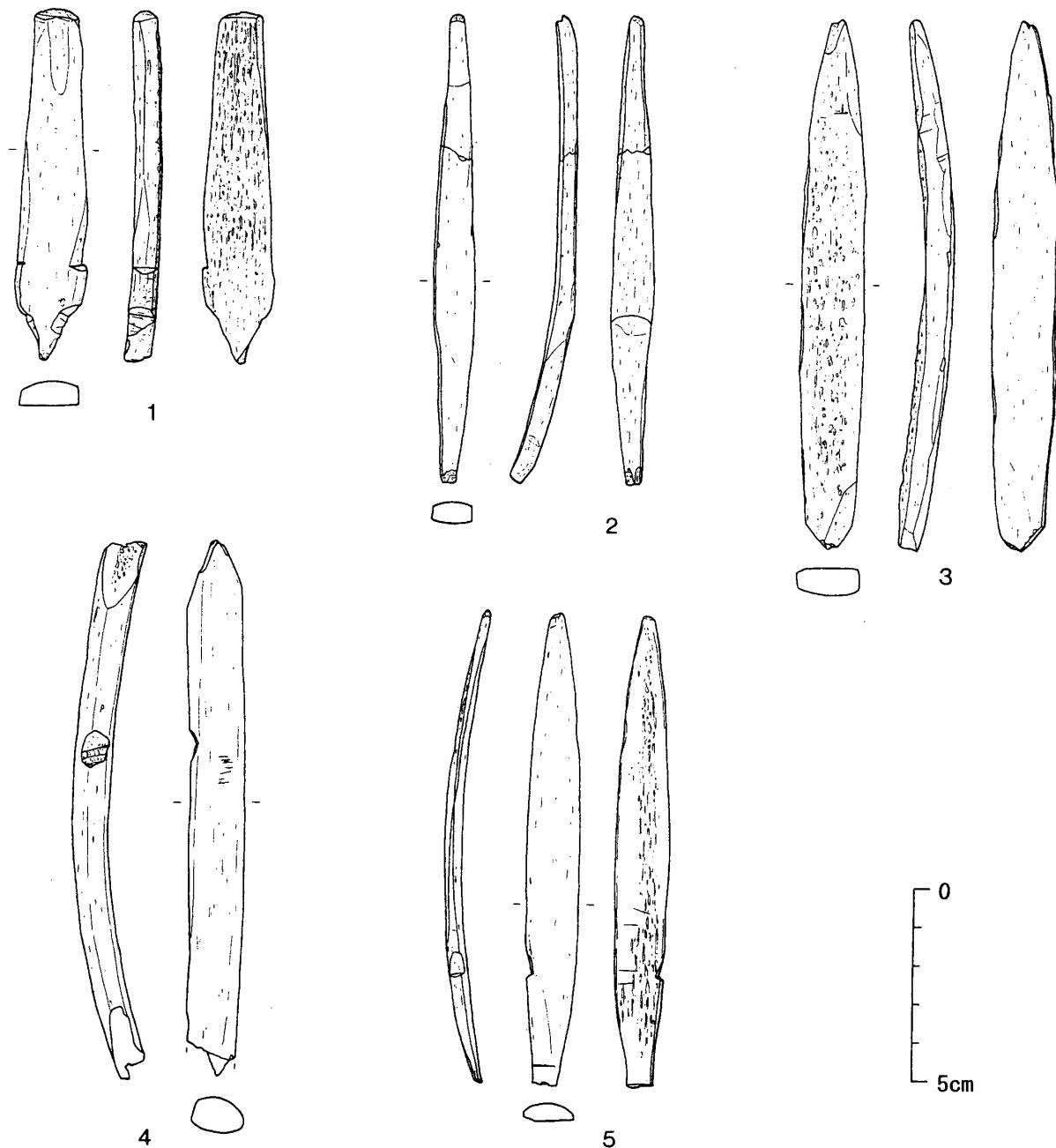


図5 10号竪穴貝層出土の鉈頭未成品

肋骨の一端を山形に切断し、左側面を切り込んだ資料である（図5-4）。やはり鉈頭の未成品である可能性が高い。No.23は海獣肋骨製であり、薄手で左側縁に切り込みを入れている（図5-5）。やはり索溝を作る段階かもしれない。また下端には切断痕を残す。断面の形状を比較すると、No.20・21が四角形であるのに対し、No.22はほぼ海獣肋骨の自然形状のままであり、No.23の背面も原材の自然面を残している。

## 2-4 旧報告との対比

ここで本稿の分類と旧報告の分類とを対比しておこう。旧報告においては、まず有鉤銛頭／廻転銛頭に分類され、さらに後者が第1類～第3類に細分されている。旧報告の有鉤／廻転の分類と本稿の雄形／雌形の分類とでは分類の着眼点が異なっているが、前述したようにこの資料に関する限り両者の結果は一致している。続いて「廻転銛頭」の細分については、第1類が有溝型、第2・3類が有窓型とされ、第2類と第3類は索孔の方向（左右／背腹）によって区分されている。この第1類は「1例、索溝とともに繫索を通すための索孔のあるものがある」とされていることから明らかなように、本稿のI類に加えてII類も含んでいる。第2類とされているのはNo.5（図2-5）であり、III類に相当する。一方、第3類はNo.3（図2-3）の頭部破片であるから、一見本稿のII類に相当するようにも思われる。しかし旧報告の記述では閉窓になると想定されていること、「他の例」として大場（1955）によって報告されているモヨロ貝塚出土資料を引用していることから<sup>6)</sup>、閉窓で背腹に貫通する横位の2索孔を有する銛頭、つまり前田分類のE群に相当する銛頭の破片だと考えていたことが分かる。また上記以外に「表土層出土の別種の銛頭」としてNo.4（図2-4）が紹介され、オホーツク文化以後に位置付けられている。IV類銛頭にあたる。

## 2-5 層位別出土状況

層位ごとの出土状況を表2に示した。大半をI類銛頭が占め、他のタイプは1点ずつの出土に過ぎない。またII～IV類銛頭は全て表土出土であった。床面からはI類銛頭に加えて雄形銛頭が出土している。同様のI類と雄形のセットが出土した例としては、常呂川河口遺跡15号竪穴（常呂町教育委員会 1996）、栄浦第二遺跡動物骨集積1（常呂町教育委員会 1995）、湧別川西遺跡2号竪穴（北方民族博物館 1995）などの例がある。

表2 モヨロ貝塚10号竪穴の層位別出土状況

層位	分類	雄形	雌形					計
			I類	II類	III類	IV類	未成品	
表土			2	1	1	1		5
貝層上			2					2
貝層			5				5	10
床面		1	5					6
計		1	14	1	1	1	5	23

## モヨロ貝塚出土の鉈頭

### 3 モヨロ貝塚出土鉈頭についての考察

#### 3-1 I類鉈頭の破損・再加工プロセス

今回報告した資料からも明らかのように、I類鉈頭には非常にバリエーションのある資料が含まれている。これらのバリエーションの中には、サイズや頭部の構造、逆鉤の有無、索溝・柄溝の形状など鉈頭の機能に直接関わる可能性が高い要素と、尾部の装飾など機能的な意味をあまりもたないと考えられる要素とがある。鉈頭が高度に機能的な狩猟具である以上、獲物の対象や使用方法による使い分けなど、使用方法の実態を明らかにしていくことは究極的な課題の一つであろう。しかし現状では実際の資料に即した議論でそこまで解釈を推し進めるのは困難である。ここでは鉈頭の形態の持つ意味について、破損と再加工と言う視点から考察を行う。

遺跡から出土する遺物の形態はあくまでも廃棄時のものであり、必ずしも製作時の形態を残している訳ではない。骨角器についても、破損した後に再加工が行われるなどして形態が大きく変化する可能性が想定できるが、具体的なプロセスは明確ではなかった。その理由としては、骨角器の製作あるいは再加工の過程では削りや研磨による加工が多く残片が残りにくいため、資料に基づいた研究が困難であるということが挙げられよう。ここでは市立函館博物館所蔵のモヨロ貝塚出土資料の中から、鉈頭の破損と再生の様子がわかる資料を紹介し、考察を加えたい。これらの資料は1941・2年に、海軍施設の工事の際に出土したものである。

図6-1は一見通常のI類鉈頭のようにみえるが、下端腹面側に柄溝の上端を残しており、背面側では尾部だけ削りが非常に粗い。中央で折れた鉈頭の上半部を素材として再利用し、新たに索溝と柄溝を作り直し、尾部を削りかけている段階のものであろう。2も同様の資料であるが、下端は折れたままで全く再加工されておらず、背面側に索溝の上側、腹面側に柄溝上端が残る。素材が薄いため、新たに作られた索溝は両側から抉りを入れただけで済ませており、柄溝もごく浅いが、どちらも加工は完了している。3は新たに索溝と柄溝を作り出す途中であり、索溝は粗く削られ、柄溝は一回削りを入れただけの状態である。また、下端は少し削られて細くなっているが、索溝と柄溝の痕跡を残している。

4・5は索溝を2本持つ資料である。4は深い索溝を2本持っているが、特に下側の索溝の下部が削られて痕跡的になっている。柄溝奥壁の海綿質部分が破損しており、おそらく使用の際の衝撃によるものだと考えられる。5ははっきりした2本の索溝をもつ。右下半を欠損しており、この破損の結果、廃棄されたと考えられる。これらのように2本の索溝をもつ資料の存在はこれまで注意されてこなかった。これらの索溝はどちらも柄溝の裏に対応する位置にあり、例えば一方は索溝、他方は柄結縛溝といったような機能的な分化があったとは考えにくい。したがってこれらの索溝は同時に使用されたものではなく、再加工の結果生じたものと考えるのが妥当であろう。その場合、柄溝の上端と対応するのは上側の索溝であることから、こちらが新しいと判断することができる。4において下側の索溝が痕跡的であることもこの推測を裏付ける。

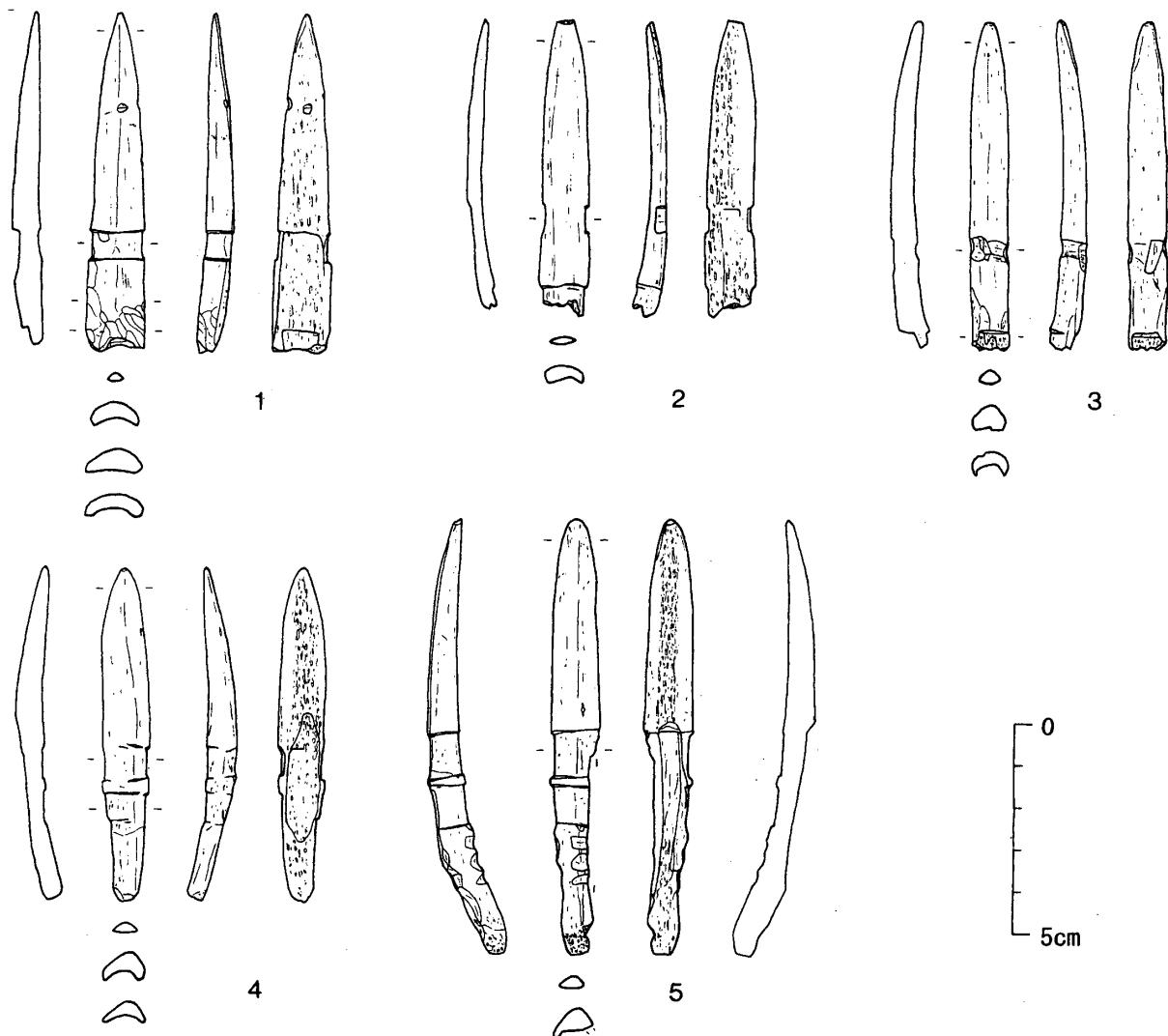


図 6 モヨロ貝塚出土の鉈頭(1)

1～3はいずれも再加工途中と考えられる。何らかの理由でこのまま完成させても使用に耐えないと判断されたのかもしれない。しかしサイズの点では完成品と比べても特に小さすぎるとまではいえないため、なぜ途中で放棄されたのかは不明である。一方、4・5はいずれも使用に伴って破損した可能性が高いため、再加工後実際に使用されたものだと考えられる。

以上の資料に基づいて推測される鉈頭の破損・再加工プロセスを図7に示した。再加工にあたって加えられる加工の種類には、A 頭部削り、B 索溝作出、C 柄溝作出、D 尾部削り、の4つがある。破損・再加工プロセスは大きく二つのパターンに分けることができる。すなわち、I 削りのみによる再加工、II 柄溝と索溝を新たに作り出す再加工、の二つである。

I-1は頭部が折れた資料に対し、上端を削って再び尖らせ、より短い鉈頭として再生するものであり、いわば先端部の研ぎなおしといえよう。これまで鉈頭の破損・再加工が想定されるとすれば、このパターンが一般的であったと思われる。I類鉈頭と類似した形態の開窓式・兼用式の鉈頭

## モヨロ貝塚出土の鉈頭

は擦文化にもみられ、先端部が長いものと短いものとが存在する。前田（1997）、石川（1998）は、この違いが機能的な相違を示している可能性以外に、先端部の破損と再加工によって生じた可能性に触れている。その根拠として石川は先端部が短い鉈頭では先端の削りの単位が大きくなることを指摘した。また、ここで論じているのとは違うタイプの鉈頭（本稿の分類ではⅡ類・Ⅳ類）についてであるが、オホーツク文化の鉈頭の再加工については種市（1998）が扱っている。やはり折損後に先端を再加工することによって鉈頭が短くなるという過程を想定している（p.332：図8）。

I-2は尾部が折れた資料に対し、下端を削って尾部を作り直し、短い鉈頭として再生するパターンである。これまで余り想定されることがなかったが、尾部が比較的短い資料の中にはこのような再加工の結果の生じたものが含まれている可能性がある（例えば大場 1955：第4図、K.63など）。

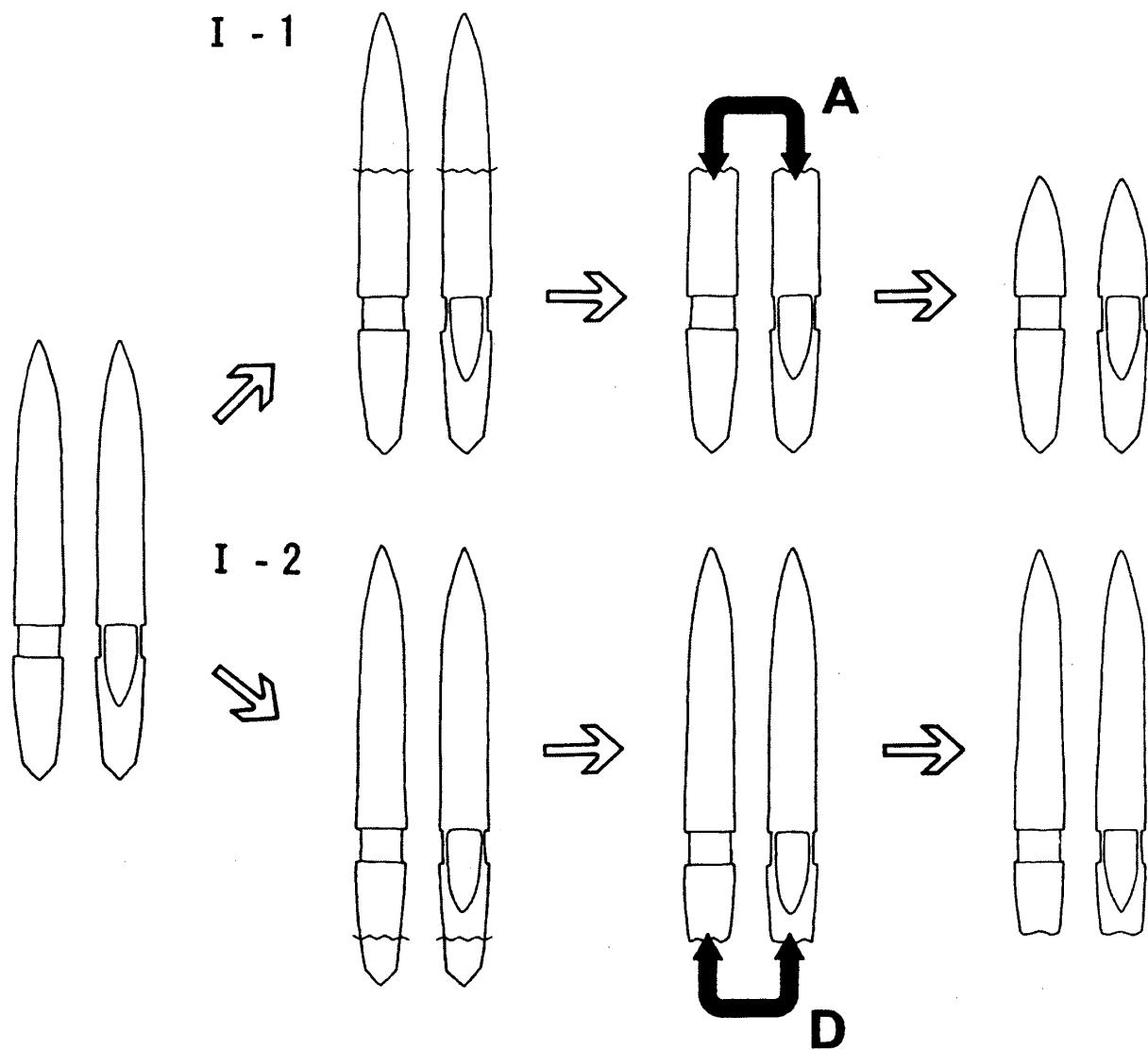
IIに示した柄溝と索溝を新たに作るパターンは、図6の資料によって明らかにされたものである。II-1は中央で折れた鉈頭の上半部を再利用するパターンである。索溝の部分で折れている例は、モヨロ貝塚10号竪穴出土資料にも含まれており、他遺跡出土の資料にも非常に多くみられる。その理由としては、ここが鉈頭をつなぎとめる力が加わる部分であるということと、背腹両面が削られていて最も薄い部分であるということが挙げられよう。図6-1・2では索溝と柄溝の作出は完了しており、1はさらに尾部を削りかけている。つまりこの2例では索溝と柄溝の作出（B・C）が尾部の削り（D）に先行している。したがって図7でもB+C→Dという加工の順番を想定して並べてある。しかし図6-3の例においてはB・C・Dの加工がいずれも手をつけただけで途中の段階に留まっていることから、これらの加工が加えられる順序は必ずしも厳密なものではなかつたのかもしれない。

II-2は尾部が折れた鉈頭に対して、索溝と柄溝を作り直して尾部を削るというパターンであり、II-3は柄溝の奥壁が破損して再加工するというパターンである。柄溝奥壁の破損も遺物にしばしばみられるものである。いずれも2本の索溝ないしその痕跡を残す可能性があるため、図6-4・5がこのII-2/II-3のいずれに対応するかははつきりとは分からぬ。しかし、5については尾部を削り直した形跡がないことから、II-3のパターンである可能性が高いといえよう。

中央で折損後再加工するII-1のパターンの存在は、鉈頭の使用方法についても示唆を与えてくれる。この部分は索溝にあたるため、ここで折損した場合鉈頭は繫留機能を失い回収できないはずである。しかし、実際に図6-1～3のように再加工された資料が存在するということは、複数の鉈頭が同時に使用されていた可能性を示唆する。もちろん使用時以外に破損したという可能性も否定することはできない。

また図7で想定した再加工プロセスにおいては、再加工が徹底して行われた場合、いずれもその痕跡を見出すことは困難になる。したがって再加工の痕跡を残さない資料についても、その可能性を完全に否定することは難しい点に注意が必要である。

以上、モヨロ貝塚出土資料に基づいてI類鉈頭の破損・再加工プロセスの復元を試みた。このような再加工の痕跡を残す資料の存在はこれまで知られていなかったが、資料の再調査によって他の



I 削り

I - 1 頭部破損 A

I - 2 尾部破損 D

II 柄溝・索溝作出

II - 1 中央破損 B + C + D

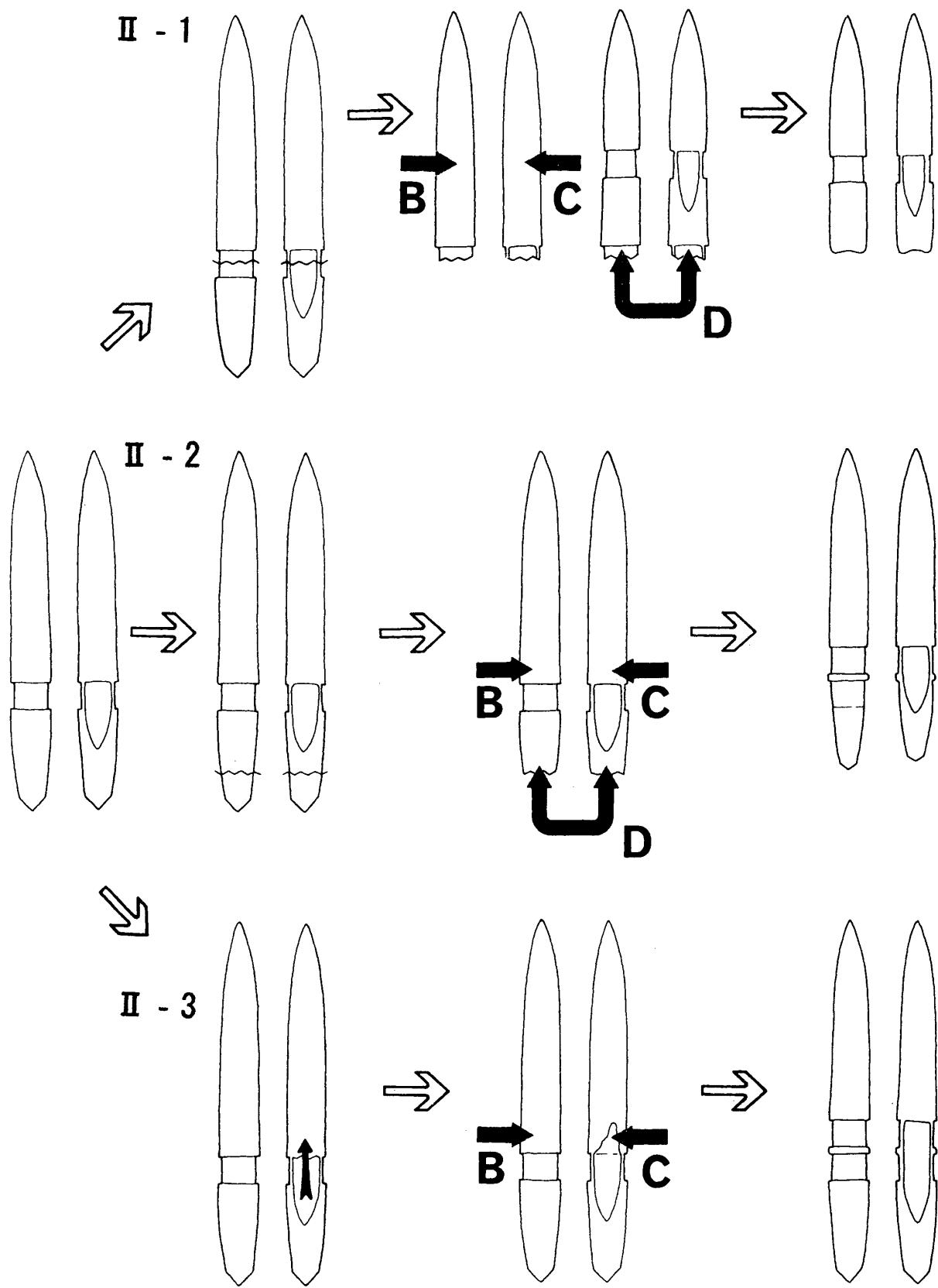
II - 2 尾部破損 B + C + D

II - 3 柄溝奥壁破損 B + C

(A : 頭部削り, B : 索溝作出, C : 柄溝作出, D : 尾部削り)

図 7 錛頭の破損・

モヨロ貝塚出土の鉈頭



再加工プロセス模式図

遺跡でも発見される可能性がある。またもし原材の供給に遺跡ごとに差があるとすれば、このような再加工が行われる頻度に差が生じ、出土する資料の破損率や破損部位、形態の違いに反映される可能性がある。そのようなところまで議論を展開できるのか、今後検討していきたい。

### 3-2 II類銛頭について

本稿でII類とした開窓式・分離式の銛頭は、前田（1974）の分類では「B群」銛頭にあたる。前田はこのタイプについて、貼付文期に主に網走以東の道東と南千島に分布し、サハリンにも存在すると述べ、その系統についてはそれぞれの地域のI類銛頭から派生したものと考えている<sup>7)</sup>。このタイプの銛頭は北海道内では根室半島や知床半島で出土する<sup>8)</sup>。また最近常呂町トコロチャシ跡遺跡オホツク地点7号竪穴からも出土している（高橋 2002：写真24）。

No. 3は10号竪穴資料の中では唯一のII類銛頭である。市立函館博物館所蔵資料中の約二百点の銛頭を観察した中にもこのタイプを確認することはできなかったことから、モヨロ貝塚の銛頭の中では例外的であったということができよう。また網走・常呂の両地域は相当に調査が進んでいるにもかかわらず、それぞれの地域における銛頭の組成の中で圧倒的に少数であるということは、このタイプの銛頭の使用時期がかなり限定されていたことを示唆している。

No. 3は柄結縛溝の部分が特徴的で、柄結縛紐を両側のスリットに通すようになっている。このスリットは長さ11~12mm、幅1 mmと非常に細長いのが特徴的である。径1 mm以下の細い紐を巻いたとも考えられるが、帯状の皮革などを通したのかもしれない。非常に細かい作りであるためかなり弱かったのではないかと考えられ、実際に右側のスリットは破損している。柄溝奥壁も破損しているが、この部分も海綿質の部分に位置しているためかなり衝撃に弱かったと考えられる。これらの点から、精密な作りとは裏腹にこの銛頭の機能性にはやや疑問が残る。類似する構造の柄結縛溝をもつ資料としては、図8-1に示したオンネモト遺跡出土の例がある（国分他編 1974）。中央一箇所であるが、同様のスリットが作られている。

一方、No. 3とオンネモト遺跡出土資料は尾部の形態では相違をみせている。No. 3は、V字形に尖る尾部の両側に小さな切り込みを入れて浅い三距のようにしている。この尾部の平面形態は、トコロチャシ跡遺跡出土例にやや類似する。これに対してオンネモト遺跡出土のII類銛頭を図8-1~7に示した。基本的に尾部端にV字形の抉りが入って深い双距になり（1~5），中にはさらに両側に浅い切り込みが入っていわば四距になる例もある（1・5）。7は小形であること、頭部に刃溝をもたず逆鉤をもつことなど、やや他とは異なる特徴をもつ銛頭であるが、尾部形態も例外的に中央の距が突出する三距になっている。深い双距という尾部形態はオンネモト遺跡のI類銛頭においても共通する例がある。このことは尾部の形態においてII類銛頭がそれぞれの地域のI類銛頭と共に高いことを意味し、II類銛頭がそれぞれの地域のI類銛頭を基盤として作られたという考え方を裏付けるものである。

つづいて北海道以外の地域のII類銛頭について簡単に触れておきたい。図8-8~11に南千島出

モヨロ貝塚出土の鉛頭

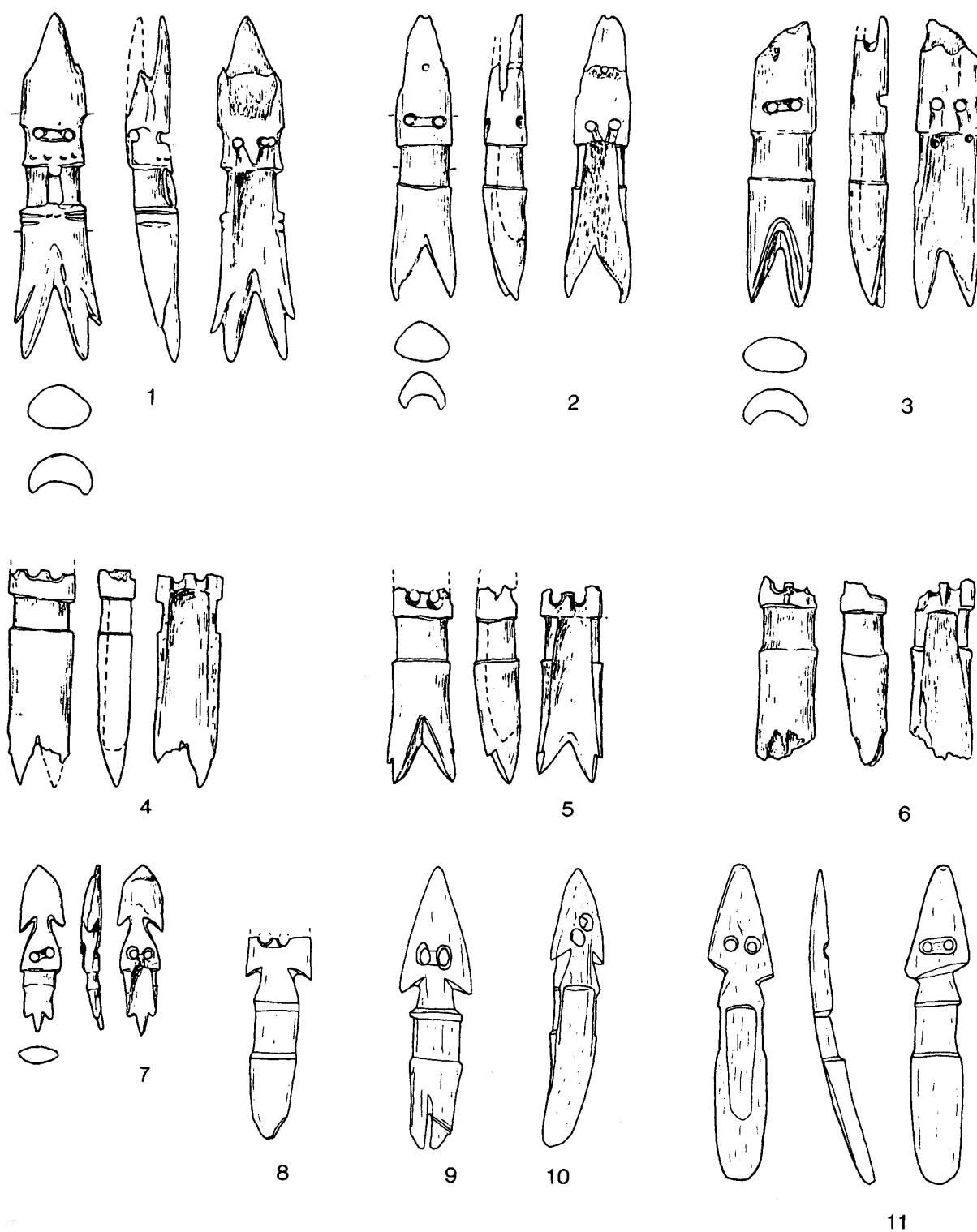


図8 道東・南千島出土の鉛頭

1～7 オンネモト遺跡, 8 恩根別貝塚, 9・10 植別貝塚  
11 不詳

(縮尺およそ1/2)

土例を示した（谷 1931, 馬場 1937）。頭部に刃溝をもたず、逆鉤を持つ点が特徴的である。この点について種市（1998）は「破損した鉤頭・・・頭部を三角形に尖らせ、頭部下端の両側縁に抉りを入れカエリを作出し・・・前田 A 群 3 類（逆鉤をもつ I 類鉤頭・・・引用者註）として再利用した」(p.335) と述べている。つまり本来は道東の資料と同様の形態であったのが、再加工によって変形したものだと考えている。根拠としては、頭部近くに繫索が装着されると刺突の邪魔になること、オンネモト遺跡出土例で刃溝の部分が破損している例が多いことを挙げている。

これらの理由のうち索孔の位置と刺突・回転機能の関係については今後実験等によって明らかにしていく必要があるだろう。また変形の結果廃棄直前の段階では索孔が使用されなかったという可能性も否定できない。しかし、南千島出土資料にみられる類似の強さは、やはり南千島と道東では型式学的に違いが存在したことを窺わせる。例えば、道東の資料と南千島の資料では溝と孔の距離にやや違いがみられる。南千島では離れているのに対し道東では近いので、たとえ再加工をしても南千島の資料のような形態にはなりえない。したがって、少なくとも両地域に形態の差が存在していたことは確かである。また図 8 にみられるように、オンネモト遺跡出土資料では確かに刃溝の破損も多いが（7 例中 3 例）、索孔の部分で折損している例も多い（7 例中 3 例）。このことからも、南千島出土例を全て刃溝破損→再加工の結果として説明するのはやや無理があるといえよう。

サハリン出土例は、索孔が縦位に並ぶなど道東・南千島のものとはやや違う特徴を有している。サハリンでは I 類鉤頭も、他地域のものと比較して、扁平で薄く柄溝が浅いという特徴があるとされている（前田 1974）。したがって II 類鉤頭についても、道東・南千島との関連を考えるよりも、まずサハリンの鉤頭の中で位置付けていく必要があるだろう。

### 3-3 III類鉤頭の素材について

閉窓式で幅が狭い III類鉤頭にもいくつかのバリエーションがみられる。しかし小形・扁平なものが鈴谷期の特徴であるという指摘がある以外（前田 2002），余り論じられることはなかった。ここではモヨロ貝塚出土資料から特徴的な一群を抽出し、考察を加える。

No. 5 は 10 号竪穴出土資料の中で唯一の III類鉤頭である。このタイプとしては小形の資料であるが、最も特徴的な点は海獣の肋骨を使用して製作されていることがある。従来知られていた III類鉤頭の製作方法は、鹿角や鯨骨の緻密質部分を板状に切り出した原材から、製作するというものであった。それに対してこの資料は、海獣肋骨を適当な長さに切断し、原材の形をかなり残すようにして作られている。

市立函館博物館所蔵のモヨロ貝塚出土資料の中にも、No. 5 と同様の海獣肋骨製の III類鉤頭がある（図 9）。No. 5 と同様に海獣肋骨の原材の形を残しているため、器体は左右非対称である。1 は一見完形品に見えるが、中央の海綿質が頭部の刃溝まで抜けてつながってしまっている。2 も柄槽から尾部にかけて海綿質が破損しており、3 は尾部が折れている。なお小形のものが全て海獣肋骨製というわけではなく、図示していないが同程度の大きさで鹿角製の資料も存在する。

### モヨロ貝塚出土の鉈頭

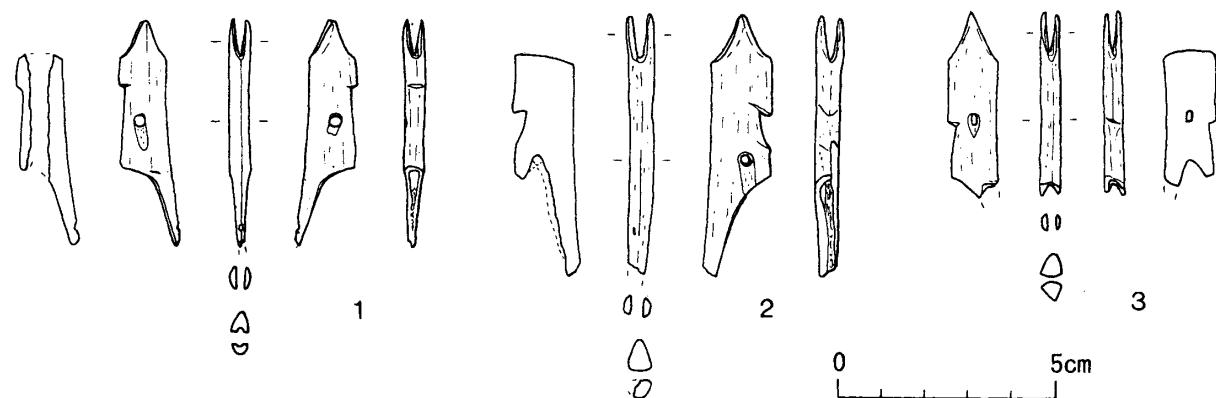


図9 モヨロ貝塚出土の鉈頭(2)

形に多少の変異はあるが、これらの資料から、モヨロ貝塚において海獣肋骨製の小形のⅢ類鉈頭がある程度確立されたタイプであった、ということができる。小形で薄いこと、中央の力が加わる部分に海綿質がきていることから、かなり弱いと考えられる。実際、4例全て柄槽の周辺が破損している。大形のものとは用途が異なっていたのかもしれない。

これらの鉈頭は編年的にどう位置付けられるであろうか。今回紹介した資料は表土出土ないし出土位置不明で層位的裏付けがないため、型式学的な考察を行う。トコロチャシ跡遺跡からは、海獣肋骨を切断し原材の形をかなり残して製作されたⅠ類鉈頭が出土している（高橋 2001b）。この製作技法は海獣肋骨製のⅢ類鉈頭におけるものと非常に類似している。しかし、前田（1974）によれば、Ⅲ類鉈頭は貼付文期にはすでに使用されなくなるとされており、これまで確実に貼付文期に伴った例は知られていない。したがって、Ⅰ類鉈頭とⅢ類鉈頭にみられる製作技法の類似は、両者の時間的な並行関係を示すものではなく、共に海獣肋骨を原材として選択したことによって生じたものだと考えられる。一方、原材の選択の変化という点に注目すると、道東の貼付文期に海獣骨製のⅠ類鉈頭が卓越するという現象は、時代が下るにつれて鹿角・鯨骨から海獣骨への志向性が高まった結果として捉えることができよう。これらの点を考慮すると、海獣肋骨製のⅢ類鉈頭は、貼付文期まで下るとまではいえないとしても、Ⅲ類鉈頭の中でも新しい段階に位置付けることができる。

### 4 結論

東京大学文学部列品室所蔵のモヨロ貝塚10号竪穴出土資料のうち鉈頭23点を報告し、市立函館博物館所蔵のモヨロ貝塚出土資料の一部と併せて考察を行った。この結果次のことが明らかになった。

- ① 10号竪穴出土資料は雄形と雌形Ⅰ～Ⅳ類に分類されるが、主体を占めるのはⅠ類鉈頭である。床面からはⅠ類鉈頭と雄形鉈頭が出土している。
- ② Ⅰ類鉈頭（開窓式・兼用式）について、破損と再生の様相を検討した。頭部・尾部の再加工に加え、索溝と柄溝が新たに作出される場合がある。
- ③ Ⅱ類鉈頭（開窓式・分離式）は、北海道では常呂から根室にかけての道東部に分布し、南千

## 高 橋 健

島出土例とは型式学的にやや異なっている。

- ④ Ⅲ類鉈頭（閉窓式で幅が狭い）には、小形で海獣肋骨製の例が存在する。原材の利用法が時期的・地域的に異なっていた可能性がある。

### 謝辞

資料の見学にあたっては、市立函館博物館、函館市立北方民族資料館、長谷部一弘、佐々木愛の諸機関・諸氏にお世話になった。原材の同定については桑原岳仁、図版の作成については山崎真治、大木真徳、吉池敦子の協力を得た。また宇田川洋先生をはじめとする東京大学考古学研究室の諸先生方には日頃からご指導を頂いている。記して感謝したい。なお本論は笹川科学研究助成を受けて行われた研究成果の一部である。

### 註

- 1) 旧報告で「廻転鉈頭1」として分類されていたと考えられる資料のうち2点については、骨鏃の可能性が高いと判断して今回は扱っていない（うち1点は佐藤 1954：図版9-4にあたる）。一方、後述するように「槍」として分類されていたNo.14は鉈頭だと判断した。
- 2) ただし鉈頭は下層住居址からは出土していない。
- 3) 筆者は以前、繫索の機能に注目して「索紐兼用式」と「索独立式」の呼称を用いた（高橋 2001a）。しかしその後、繫索や柄結縛紐そのものは遺物としてはほとんど残らないことから、遺物として確認できる部分に注目した呼称を用いるべきだと考えるに至った。したがって本稿では鉈頭の繫留機能と固定機能とに注目し、繫索を装着する部分（索溝・索孔）と柄を結縛する機能との関係による呼称として、「兼用式」「分離式」を用いている。それぞれの指す内容は従来と変わらない。
- 4) 前田の新分類では「G群」となる（前田 2002）。
- 5) ただし同年に刊行された『考古図編』では「大きな鉈の先端」とされている（東京大学文学部 1964）。
- 6) 後述するように、モヨロ貝塚からはNo.3以外のⅡ類鉈頭の出土例は管見の限り知られていない。
- 7) I類～IV類の分類はモヨロ貝塚資料の分類の目的で設定したものであるが、煩雑さを避けるため、それに相当する他遺跡出土の資料についても、これらの呼称を用いる。
- 8) 根室半島では、後述するオンネモト遺跡以外に弁天島遺跡からも「B群1類」が出土したとされている（前田 1974：表1, 2002：表3）。また知床半島では、羅臼町松法川北岸遺跡から出土した資料が2点報告されている（羅臼町教育委員会 1984）。

### <引用文献>

- 石川直章 1998 「回転式鉈先再考」『時の絆—石附喜三男先生を偲ぶ』：pp.293-313  
右代啓視 1992 「北海道常呂町出土のオホーツク文化の骨角器（加藤コレクション）」『北海道開拓記念館調査報告』31：67-85  
宇田川洋 1980 「第二節 物送り場としての竪穴上層遺構について」『ライトコロ川口遺跡』：pp. 98-106  
大塚和義 1976 「アイヌのキテの諸系列」『国立民族学博物館研究報告』1(4)：778-822  
大場利夫 1955 「モヨロ貝塚出土の骨角器」『北方文化研究報告』10：1-77  
国分直一・北構保男・増田精一・岩崎卓也・前田潮編 1974 『オンネモト遺跡』東京教育大学文学部考古学研究報告4, 東京教育大学文学部

## モヨロ貝塚出土の鉈頭

- 駒井和愛編 1964『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下巻, 東京大学文学部  
駒井和愛・佐藤達夫 1964「オホーツク遺物の特色」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下巻: pp. 78-88  
佐藤達夫 1954 「我が国に於ける回転式鉈頭について」東京大学文学部大学院特別研究奨学生前期論文 (佐藤 1983『東アジアの先史文化と日本』: pp.349-414所収)  
市立函館博物館編 1983『児玉コレクション目録 I 先史・考古資料編』  
高橋 健 2001a「縄繩文時代前半期の鉈頭について」『東京大学考古学研究室研究紀要』16: 83-137  
高橋 健 2001b「第二節 トコロチャシ跡遺跡出土の鉈頭について」『トコロチャシ跡遺跡』: pp. 164-175  
高橋 健 2002「海に生きたオホーツク人」『北の異界—古代オホーツクと氷民文化』: pp.80-93  
谷 敬一 1931「択捉島東海岸発見の骨牙器」『史前学雑誌』3(4): 15-25  
種市幸生 1998「キテをめぐる諸問題(後編)」「時の絆—石附喜三男先生を偲ぶ」: pp.315-347  
東京大学文学部 1964『考古図編』20  
常呂町教育委員会 1995『栄浦第二・第一遺跡』  
常呂町教育委員会 1996『常呂川河口遺跡(1)』  
西秋良宏・宇田川洋編 2002『北の異界—古代オホーツクと氷民文化』, 東京大学コレクションXII, 東京大学出版会  
馬場 倖 1937「千島群島出土の狩猟具及び漁具」『民族学研究』3(2): 89-131 (馬場1979『権太・千島考古・民族誌』2: pp.128-173所収)  
北方民族博物館 1995『湧別町川西遺跡—北海道東部におけるオホーツク文化の遺跡調査—』  
前田 潮 1974「オホーツク文化とそれ以降の回転式鉈頭の型式とその変遷」『史学研究』96 (前田 1987『北方狩猟民の考古学』: pp.65-114所収)  
前田 潮 1997「擦文文化の回転式鉈頭」『国立歴史民俗博物館研究報告』70: 97-121 (前田 2002『オホーツクの考古学』: pp.47-75所収)  
前田 潮 2002『オホーツクの考古学』, 同成社  
羅臼町教育委員会 1984『松法川北岸遺跡』, 羅臼町文化財報告 8

### <図の出典>

図2～図5 東京大学列品室所蔵資料 (表1参照)。

図6 市立函館博物館所蔵資料(児玉コレクション) : No.は資料番号, 括弧内は大場(1955)の番号。

1 No.1575 (K.98), 2 No.1660 (K.181), 3 No.1999, 4 No.1591 (K.115), 5 No.1583 (K.107)

図8 1～7 国分他編(1974:第43図)より転載, 8～11 馬場(1937)よりトレース。

図9 市立函館博物館所蔵資料(児玉コレクション) : No.は資料番号, 括弧内は大場(1955)の番号。

1 No.1500 (K.23), 2 No.1499 (K.22), 3 No.1502 (K.24)

# Harpoon Heads from the Moyoro Shell Mound

Ken Takahashi

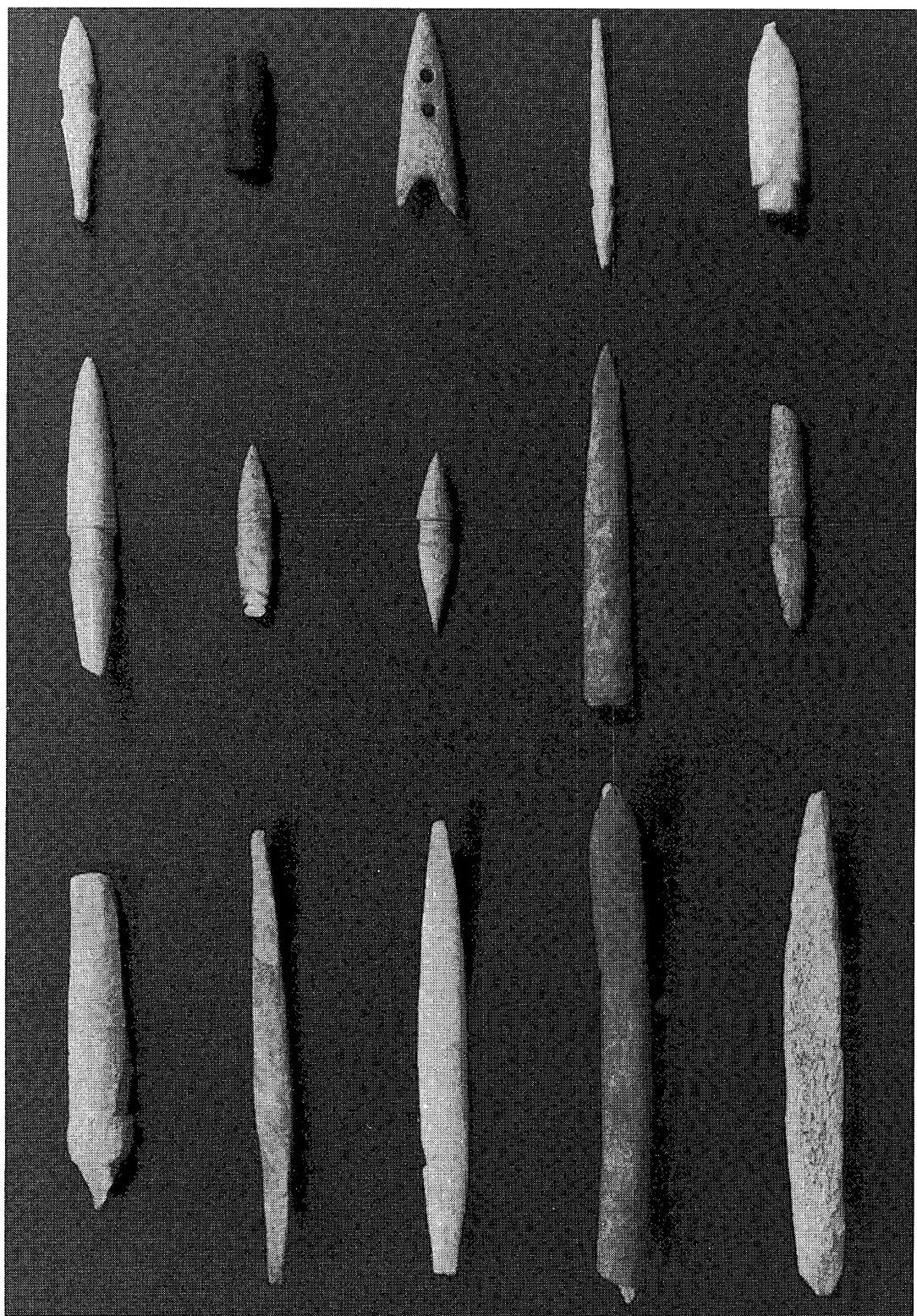
This paper discusses the harpoon heads excavated from the Moyoro Shell Mound, a famous archaeological site of the Okhotsk culture in Abashiri City, Hokkaido Prefecture. The site is located on the left bank of the Abashiri River, which flows into the Okhotsk Sea (Fig. 1). Archaeological finds from the Moyoro Shell Mound, which were excavated from the Pit-dwelling No.10 in 1948 (Komai ed. 1964), are preserved by the Department of Archaeology, Faculty of Letters, the University of Tokyo. In this paper, harpoon heads made of bone and antlers in this collection will be described and discussed. In addition, some harpoon heads in the collection of the Hakodate City Museum will also be discussed; these specimens were unearthed from the Moyoro Shell Mound in 1941 and 1942.

From the Pit-dwelling No.10, 23 harpoon heads were excavated (Fig. 2~5, PL. 1~4). They are classified by the way they are hafted and connected to the line. While only one male harpoon head was found from the floor of the dwelling, 22 female harpoon heads were unearthed from the floor and upper layers, including five unfinished specimens. The female-toggle harpoon heads are subdivided into four types.

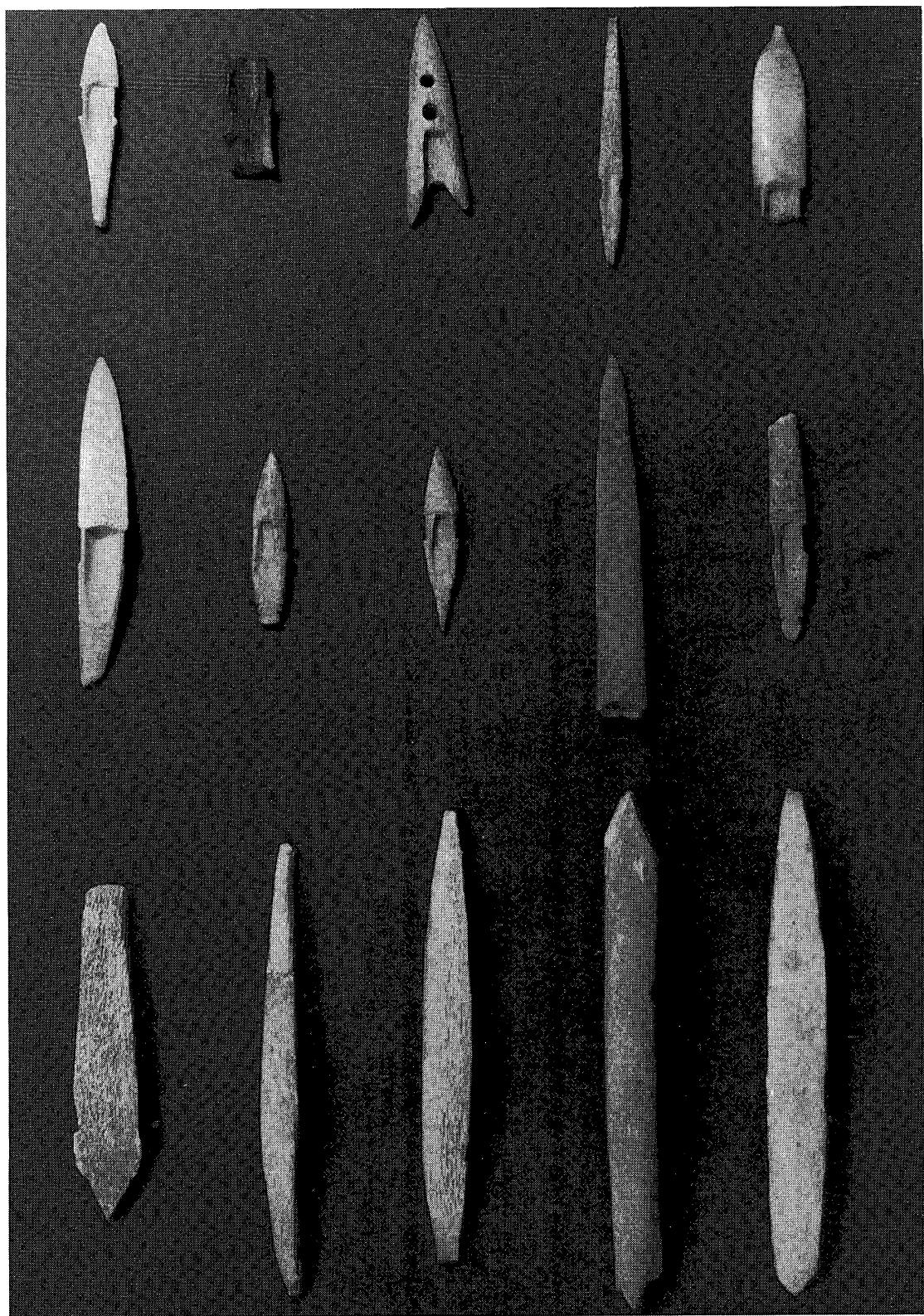
Type I is an open socket harpoon head, with a line groove also used for lashing the shaft or the foreshaft. Type II is an open socket harpoon head with two line holes to hold the harpoon head and a groove for lashing the shaft or the foreshaft. Type III is a closed socket harpoon head with a thin body. Type IV is an open socket harpoon head with two line holes, which belongs to the Ainu period. The number of harpoon heads of each type found from each layer is shown in Table 2. Type I harpoon heads constitute a large proportion of the unearthed harpoon heads, while only one specimen for each of Type II, Type III, and Type IV was found from the topsoil.

Some of the Type I harpoon heads show the traces of reprocessing (Fig. 6). The reduction process of this type of harpoon heads was reconstructed based on these materials (Fig. 7). The Type II harpoon heads in eastern Hokkaido, distributed from Tokoro to Nemuro, are typologically different from the Type II harpoon heads in Southern Kuriles (Fig. 8). Some of the Type III harpoon heads are made of the ribs of sea mammals; this technique is characteristic of this site (Fig. 9).

モヨロ貝塚出土の銛頭

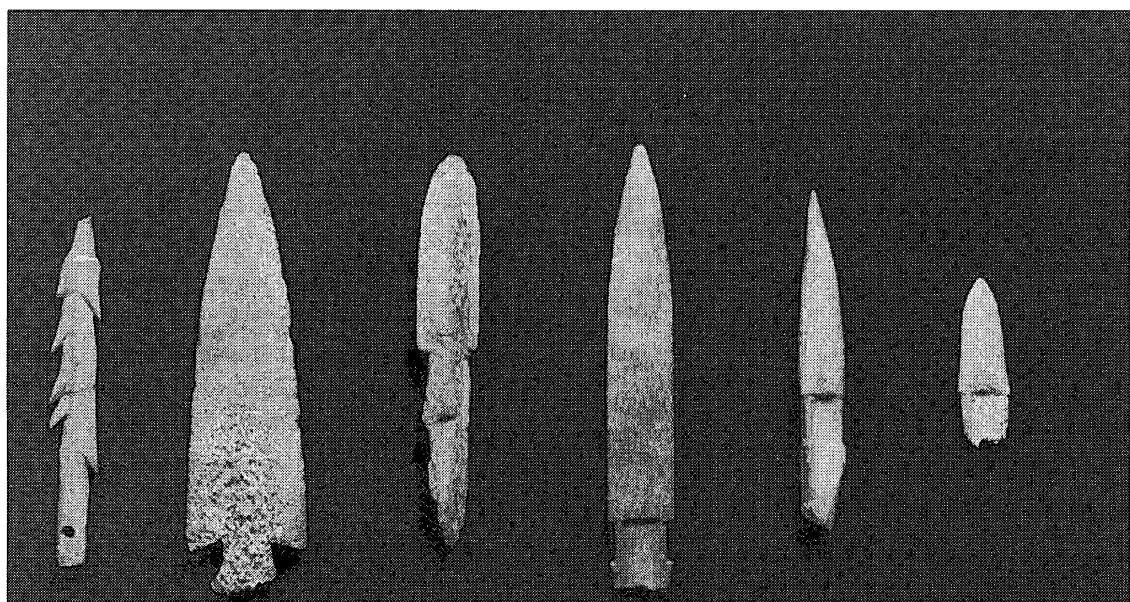
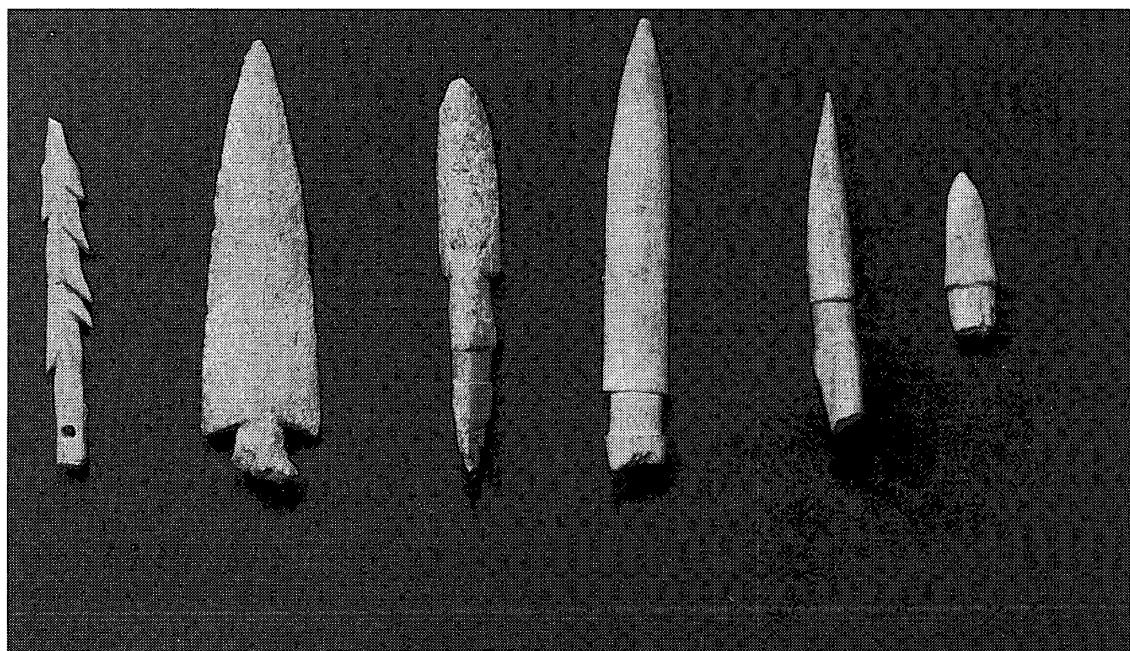


図版1 10号堅穴表土・貝層上・貝層出土の銛頭(1) (縮尺およそ1/2)



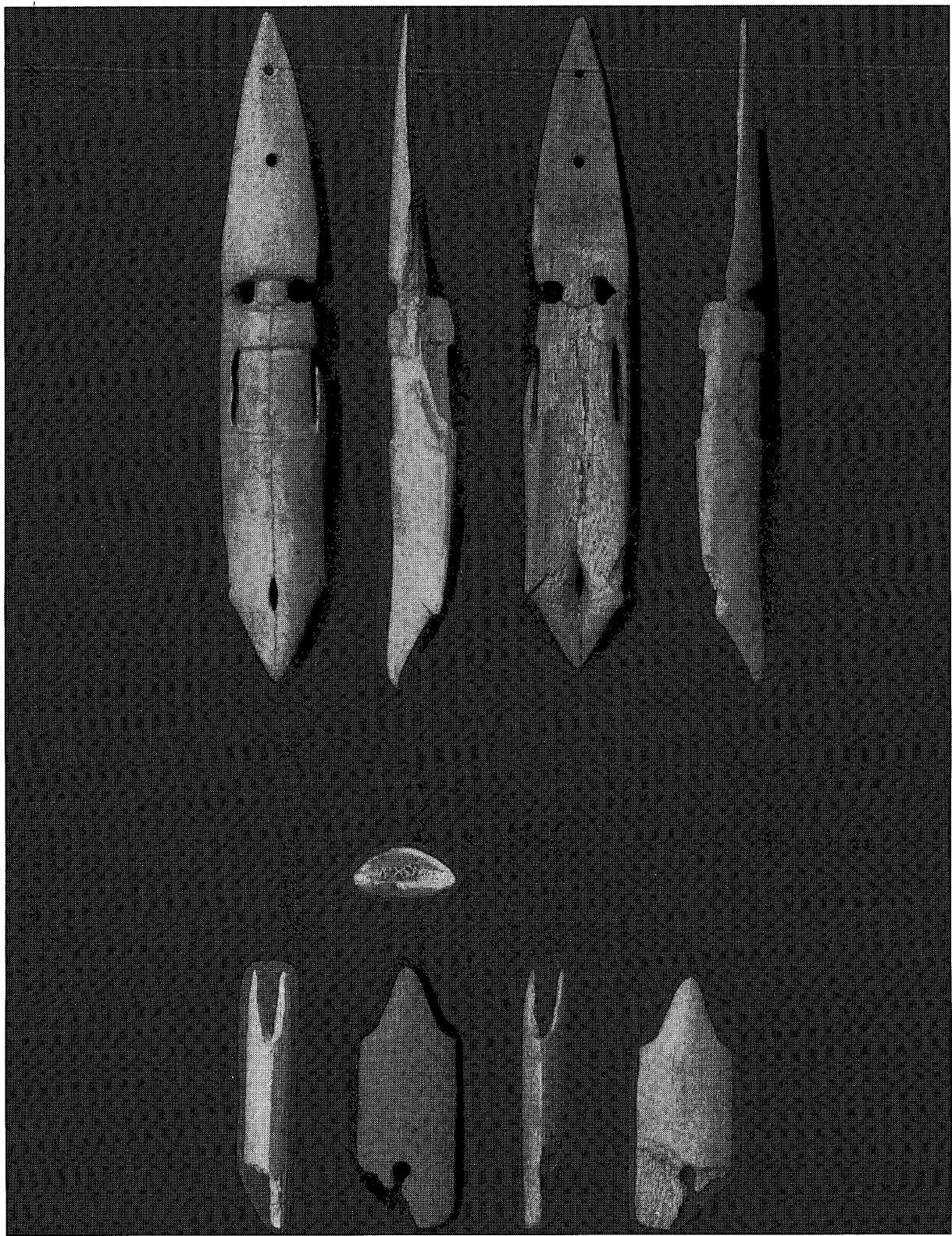
図版2 10号堅穴表土・貝層上・貝層出土の銛頭(2) (縮尺およそ1/2)

モヨロ貝塚出土の鉛頭



図版3 10号竪穴床面出土の鉛頭（縮尺およそ1／2）

高 橋 健



図版4 10号竪穴表土出土の鉈頭（ほぼ実大）  
(上段：No. 3, 下段：No. 5)